# 夢を応援基金

## ～東日本大震災奨学金制度～

2013年度活動報告

LAWSON　CIVIC FORCE　CHARITY PLATFORM

# 制度概要

| 名称 | 「夢を応援基金」(東日本大震災奨学金制度) |
|---|---|
| 奨学金 | 月額30,000円(給付、返還不要) |
| 奨学生 | 約1,097名（2011年9月奨学金給付開始時の人数） |
| 目的 | 本奨学金は、2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下「本震災」という。)によって経済状況が急変、または悪化し、就学継続が困難な状況にある、日本国内の高等学校及び高等専門学校(1~3年)、並びに高等専修学校に在籍する生徒に対し、大学など上級学校卒業までの間、奨学金を給付することにより、経済的不安を緩和し、学習効果を高めることを目的として寄与するものです。 |
| 運営体制 | 創設者：株式会社ローソン<br>運営主体：公益社団法人Civic Force<br>基金事務局（奨学生等との窓口業務）：特定非営利活動法人チャリティ･プラットフォーム<br>*この事業は、Civic Forceの「中長期復興支援事業」の一環として運営されています。また、奨学金を含む運営のための資金は、ローソンによる店頭募金やPontaポイントでの募金のほか、Civic Forceオンライン寄付などから受け付けられた寄付により賄われています。 |
| 支援の内容 | ■ 月額3万円の奨学金給付(返還不要)<br>■ 教育プログラム（ボランティア活動、海外研修など）の実施によるサポート<br>■ その他被災地の生徒や学校からの意見も取り入れ、現地のニーズに合わせた様々なサポートプログラムを実施予定 |
| 対象者<br>*募集当時 | 高校進学を控えた中学3年生（予約奨学生）、高等学校、高等専門学校（1～3年）等に在籍していた生徒 |
| 応募資格<br>*募集当時 | 下記(■)の条件をすべて満たし、かつ、AまたはBのいずれかに該当すること<br>■ 本震災時に家計を支える方が岩手県･宮城県･福島県に居住しており、同地域の学校に通学していた生徒<br>■ 学校の推薦を受けることができる品行方正な生徒<br>■ 夢をかなえるために、意欲と根性があり、東北の復興への貢献を希望している生徒<br>＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝<br>A.本震災により家計を支える方が死亡･行方不明･負傷病気･失業等の被害を受け、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒<br>B.本震災により住居していた住宅が半壊･半焼または床上浸水以上程度の被害を受け、または計画的避難区域になっているなど、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒 |
| 支給期間 | 2011年9月より高校･高等専修学校卒業または専門学校･大学などの上級学校(大学院除く)卒業までの最大7年間<br>※2011年度は、2011年9月から2012年3月までの7カ月間。以降、毎年進学時に更新手続き有り |
| 注意事項 | 受給者は、奨学金の返還義務を負いません。また、奨学金の主たる提供者(株式会社ローソン等)への入社等その他の付帯義務を負うものではありません。<br>**※2014年3月現在、奨学生は募集しておりません。** |

## 「夢を応援基金」運営協力企業

株式会社教育新聞社
運営のための様々なご協力をいただいております

認定特定非営利団体ブリッジフォースマイル
運営のための様々なご協力をいただいております

株式会社七十七銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただいています

株式会社東邦銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただいています

株式会社岩手銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただいています

# 第3期活動概要

2011年3月11日の東日本大震災発生より1カ月後、被災地の状況の把握も困難な状態が続く4月下旬、株式会社ローソン様（以下、ローソン）より、被災生徒を対象に、来年春に高校生になる子どもたちが大学を卒業するまでの最長7年間、奨学金を支給したいというお申し出をいただき、ローソンの冠プロジェクトとなる「夢を応援基金プロジェクト」が立ち上がりました。

3カ月後の7月末までに、事務局には2,400通の奨学生申請書が届き、それぞれの学生が想像を絶する状況にいることを改めて知ることとなりました。対象者予定約1,000名決定のために、外部制度検討委員会も含め、約1カ月半かけ関係者間で協議され選定作業が行われました。

9月には予定を約100名超えた1,097名の奨学生が決定し、震災から半年後の10月、「一刻も早く、必要とされる方々に奨学金を届けたい」という想いが月額3万円の給付型奨学金に結実し、届けられました。

同時に、残念ながら奨学金支給の対象とならなかった生徒（応募条件を満たしていた方）のみなさんにも、奨学金の1カ月分である3万円と、ローソンで使用できるプリペイドカード6千円分が一時支援金として支給されました。

それから約2年半ーーー2013年4月、2回目となる更新手続きでは、139名の子どもたちが高校を無事卒業し、社会に羽ばたいていきました。2013年度は上級学校（大学、短期大学、専門学校等）に進学した168名を含め、896名の奨学生に奨学金を支給しました。1年間の奨学金支給を経て、2014年3月、「夢を応援基金」は皆様のご支援のお陰で、無事、第3期を終了することができました。

基金の創設者であるローソン、そしてローソングループの店頭募金にてご協力をくださった多くの皆様、寄付つき商品等でのご協力をいただいた企業の皆様、そしてオンライン寄付によりご寄付をいただいた個人の皆様に、活動のご報告と併せまして、心より御礼を申し上げます。

| 夢を応援基金の主な活動 | | |
|---|---|---|
| 2014年 | 4月 | 2014年度更新手続きを実施 |
| 2013年 | 11月 | 仙台で奨学生交流会を実施 |
| | 8月 | 東京で奨学生交流会を、宮城県で夏の体験プログラムを実施 |
| | 4月 | 2013年度奨学生の更新手続を実施 |
| | 3月 | ■「夢を応援基金」の運営主体が公益社団法人Civic Force（シビックフォース）に移行<br>■全国のローソンで、募金告知のため『1,097のありがとう。』（小冊子）を配布<br>■全国のローソングループ各店で店頭募金実施（～5月末） |
| | 1月 | 奨学生のうち、高校2年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布 |
| 2012年 | 5月 | 予約奨学生（申込時に中学3年生で、新高校1年生）への奨学金支給開始 |
| | 4月 | 2012年度奨学生の更新手続を実施 |
| | 3月 | ■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～5月末）<br>■奨学生のうち、高校2年生及び高校3年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布<br>■基金奨学生募集時に、申請書を提出した学生が在籍する高等学校及び高等専門学校に対し、自立支援ハンドブックを寄贈 |
| | 2月 | ローソン主催による、被災3県の高校生を応援する夢を応援基金「スペシャル講演＆ライブ2012」を仙台市で開催。約700名が参加 |
| 2011年 | 12月 | ローソングループ社内募金の受付開始（給与天引き制度） |
| | 11月 | 旺文社様からのご寄付と寄贈により、奨学生募集時に申請書を提出した学生が在籍する高等学校、高等専門学校、中学校全358校に対し、『それでもいまは、真っ白な帆を上げよう』を2冊ずつ寄贈（合計716冊） |
| | 10月 | ■第1回目の奨学金を支給<br>■奨学生とならなかった生徒には、支援金3万円とローソンプリペイドカード6千円分を進呈 |
| | 9月 | 1,097名の奨学生が決定（応募総数2,400名） |
| | 7月 | 被災地（岩手県、宮城県、福島県）の高等学校、高等専門学校、中学校等に奨学生の募集を告知し、奨学生を募集 |
| | 5月 | ■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～8月）<br>■ローソン各店舗にて、寄付つき商品の販売を開始（その後随時実施） |
| | 4月 | 「夢を応援基金」創設 |
| | 3月 | 東日本大震災発生 |

# 卒業した奨学生からのメッセージ

## 2014年春も、多くの奨学生が、社会へと飛び立っていきました

**「進学を諦めたけど、2年間学校に通うことができました」**

私は「周りの人達に支えられて生きている」ということを決して忘れません。東日本大震災が起きて、私の家も地元も被害を受けました。経済状況も苦しくなり、進学をしたいと思う自分自身がとてもわがままに思えたことがあります。そんな中、この基金に支援して頂いたおかげで、2年間学校に通い、**夢を叶えることが出来ました**。ご支援を頂いた皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。恩返しできるよう社会人として頑張ります。

**「夢を諦めずチャレンジできた」**

「夢を応援基金」のおかげで**夢を諦めずにどんなことにでもチャレンジすることができました**。追いかけてきた夢とは異なる仕事に就くことになりましたが、夢を実現するために努力したことは決して後悔していません。私は今までたくさんの人に支えてきてもらいました。これからは私が社会に出る後輩たちを応援していきたいです。

**「経済的に苦しく、進学を反対されていました」**

震災直後は経済的に余裕がなく、進学するのを反対されて毎日悩んでいました。そんな時、この「夢を応援基金」のおかげで勉強を続けることができました。4月からは地元に戻り介護福祉士として働きます。**被災地の復興に貢献できるよう社会人として頑張っていきたい**です。ご支援いただいた皆様には感謝いたします。ありがとうございました。

**「看護師になるという夢を叶えることができた」**

私は震災で祖父母、曾祖母を亡くしました。いつも私の味方で、私の夢である看護師になりたいという目標をずっと応援してくれていました。祖父母と曾祖母を亡くした今、私にできることは看護師になるという夢を叶えることです。全国の皆さんからご支援いただいた奨学金のおかげで勉強を続けられ、今年の3月25日に**夢であった看護師国家試験に合格できました**。天国にいる祖父母、曾祖母、私たち奨学生の夢を応援してくださった全国の皆様、本当にありがとうございました。

**「人を助けられる大人になりたい」**

高校入学を目前に大震災に見舞われ、毎日途方に暮れていたことを今でも思い出します。入学準備もままならず、教科書がそろわない状態で高校生活はスタートしましたが、笑顔を絶やさず友人たちと協力し合いながら頑張ってきました。
私は社会人になりますが、夢である歯科衛生士になるため勉強を続けていきます。**「夢を応援基金」から学んだ人の温かさ、優しさを今度は私が実践し、人を助けられる大人になれるよう頑張ります**。

**「漁師として父の手伝いを」**

私は高校卒業後、漁師として働きます。私の父親は漁師で、震災の影響で大変な思いをしていることを知りました。**卒業後は漁師になり、父の手伝いをしていこうと決意**しました。感謝の気持ちを忘れず、漁師として社会に貢献し、ご支援をしてくださった皆様に少しでも恩返しをしていきたいです。夢を応援基金の関係者、ご支援をしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

**春からは幼稚園の先生、「少しでも復興の役に立ちたい」**

「夢を応援基金」のおかげで学校に通うことができました。**夢だった幼稚園教諭の免許を取得**することもでき、春からは地元の幼稚園で働きます。たくさんの方々からのご支援で今の私があります。支援してくださった方々に感謝し、少しでも復興の役に立てるよう頑張ります。本当にありがとうございました。

**「私が支えていく立場に」**

私は**「夢を応援基金」があったからこそ高校生活を終えることができました**。東日本大震災を経験し、高校生活を送ることができるのか不安でした。ですが家族や友達がいて私はしっかり前を向くことができました。
卒業後の進路は先生と一緒に考え、やりがいをもてる就職先を選ぶことができました。社会人として辛いことや苦しいこともたくさんあると思います。しかし私には支えてくれる人たちがいます。そう思えるだけ私は前より弱くないと信じています。
悔いのないよう今をしっかり生き、これからは支えてもらうのではなくて、私が支えて行く立場になって行きたいと考えています。本当にこの3年間、ありがとうございました。

# サポートプログラム実施報告-1

## 2013年8月、教育プログラム「海の男に学ぶ」を実施

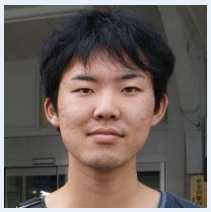
「夢を応援プロジェクト」のサポートプログラムとして、7月と8月に、東北で活動する地元NPOと協力して、奨学生向けの実践型教育プログラムを実施しました。

2013年8月21日～23日、宮城県気仙沼市で実施した「海の男に学ぶプログラム」では奨学生3人が、2泊3日のキャンプ生活を体験しました。
奨学生3人を受け入れてくれたのは、「自然の“環”から、人の“和”を育てよう！」をキャッチフレーズに、環境教育・森づくり・自然環境保全の3分野で活動するNPO法人森は海の恋人。プログラムでは、海や汽水域で暮らす生物を採取・観察したり、海と森とのつながりについて知る濃密な時間を過ごしました。

気仙沼市の最北東端に位置する唐桑（からくわ）半島は、リアス式海岸特有の美しい景観と良質な海産物の資源に恵まれた美しい半島です。

「自分一人ではよい牡蠣は育たない。ここ舞根湾（もうねわん）だけでなく、川の流れる流域、森の広がる山域、全ての人たちの気持ちが、牡蠣には凝縮される。広い視野で物事を見られるようになってください」と話す理事長の畠山重篤さん(写真右）。

海や水辺の生き物に触れるだけでなく、豊かな海を支える森とのつながりを伝えるプログラムは、未来を担う奨学生たちの心にも届いたようです。



**菅原宗一郎さん（仙台高等専門高校4年、宮城県出身）**
森と海、そして人とのつながりをテーマに、楽しみながら学べるプログラムに参加でき、とても勉強になりました。もともと海の近くに住んでいて、海には慣れ親しんでいましたが、夜の穴子釣りは初めての経験で、印象に残っています。京都大学の学生が一緒だったことでにぎやかな雰囲気のなかで過ごすことができ、同世代の学生と話して刺激になりました。機会があればまた参加して、森と海のつながりを伝えていけたらと思います。

**小山理央さん（気仙沼高校3年、宮城県出身）**
高校の教科書に載っていた森は海の恋人運動の活動のことは、以前から関心をもっていましたが、今回学校の先生に勧められた縁で参加しました。実はプログラム期間中に高校の新学期が始まってしまいましたが、公欠扱いの許可を得て、ここに来ることができ、森と海のつながりがよく分かりました。将来は大学の農学部に進学し、農業を学びたいと思っています。畠山重篤さんも言っていたように、広い視野をもって農業を学べる大学生になりたいです。

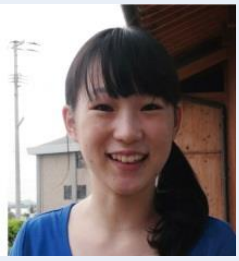
**梶原風有子さん（東京スクールオブミュージック専門学校1年、宮城県出身）**
宮城県の南三陸町出身で、今は東京の専門学校に通っています。東京に来る前は、海の近くに住んでいたのですが、海のことをあまり知らないことに気づき、もっと海への理解を深めたいと思って、このプログラムに参加しました。3日間を通して、東京にいて忘れがちだった豊かな海や自然の素晴らしさ、地元の人たちの優しさを思い出しました。将来はイベントプランナーとして、人を楽しませる仕事がしたいので、森は海の恋人の楽しくてためになるプログラムは、とても勉強になりました。

※学校名、学年は2013年8月時点のものです。

# サポートプログラム実施報告-2

## 2013年7月、福島の子どもたちとの交流プログラムを実施

2013年7月、宮城県登米市で福島の子どもたちを受け入れている「手のひらに太陽の家」（日本の森バイオマスネットワーク主催）で交流プログラムを実施しました。登米市では福島の原発事故の影響で、自立支援を必要とする震災遺児や震災により地域外避難を必要とする子どもたちを受け入れる「手のひらに太陽の家」プロジェクトが進行中です。
交流プログラムには宮城県出身の高校生と専門学校生2人が体験滞在。2泊3日にわたって、太陽の家の子どもたちと寝食をともにしました。同じく東日本大震災で被災しながらも力強く、楽しそうに遊ぶ子どもたちと触れ合ったり、施設の関係者や保護者たちとの対話を通して、広い視野で現在の被災の現状と復興に向けて考える場となることを目的に実施しました。



**池田千沙都さん（東京都立北多摩看護専門学校1年、宮城県出身）**
将来、小児科で働くのが夢で、子どもたちと接する経験をしたいと思い、太陽の家のプログラムを選びました。初めは不安でしたが、子どもたちのほうから明るく元気に接してくれ、あっという間に仲良くなれました。福島のお母さんや太陽の家の方々と一緒に食事をする中で、太陽の家の環境の良さに驚くとともに、子どもたちもみんな兄弟のように仲良く遊んでいたのが印象的でした。このプログラムに参加して本当に良かったです。

※学校名、学年は2013年7月時点のものです。

## 2013年8月東京、2013年11月仙台にて奨学生交流会を開催

それぞれの夢を掲げた東京での交流会（2013年8月26日）

高校生・専門学校生・大学生が集まった仙台での交流会
（2013年11月3日）

サポートプログラムの一環として、2013年8月に東京、11月に宮城県仙台市で奨学生対象の交流会を開催しました。集まった奨学生たちは、学校生活について紹介したり、将来の夢などについて話し合いました。

奨学生のみなさんは「家が全壊し家計が苦しくなったが、奨学金を活用して資格をとり就職することができた」「被災して大変だったが、おかげで部活動に専念できている」「夢を応援基金を通じてたくさんの人に支えられているからこそ、今、こうして勉強に専念できている。震災を機に、人に対する感謝の気持ちをもてるようになった」など被災体験を交えて、震災後に努力してきたことを発表しました。

また、普段は別々の場所で生活する奨学生同士が、初めて顔を合わせる場となり、「同じように震災で大変な境遇にいる仲間と出会えて良かった」「これからももっと交流会を開いてほしい」といった声が寄せられました。

# 奨学生の2013年度の振り返り-1

奨学生に、2013年度を振り返って「最も印象に残ったこと」、「学んだこと」、「力を入れたこと」、「来年チャレンジしたいこと」、「今、伝えたいこと」などをテーマに課題作文を書いてもらいました。

## 【今、私が伝えたいこと】

**「どんな状況でも良い方向に変えていく努力を」―― 専修学校2年／宮城県出身・在住／女性**

高校一年生の時に被災し、家族で仙台へ引っ越しました。16年間育った町や友人と離れるのはとてもつらく、転校したばかりのころは学校から戻ると「地元に帰りたい」と泣いていました。そんな私を見て父は「どんな状況の下でも楽しいことを見つけなさい」と言いました。この言葉で私は考え方を変え、それからはクラスメイトに積極的に話しかけたり、遅れがちだった勉強を各教科の先生にマンツーマンで教えてもらえるようお願いしたりしました。また、アルバイトでは店長やお客さまに怒られながらも楽しみを見つけ頑張っています。こうした経験から、私は「どんな状況でも臆することなく良い方向に変えていけるよう努力する」ことを学びました。たくさんのものを奪った津波が憎くて仕方ありませんでしたが、支えてくれる家族や地元の友人の大切さは津波がこなかったら気付けなかったかもしれません。これからは、この経験を次世代にも伝えていけるよう発信していきたいです。

**伝えたいのは「感謝の気持ち」―― 大学2年生／福島県出身・東京都在住／女性**

私は震災翌日、原発事故の影響で、福島県南相馬市の高校からそのまま避難しました。避難先は郡山市の親戚の家。4人暮らしの家に他の避難者を含めて20人ほどが集まりました。プライベートな空間もなく、ガソリンや食料も手に入らないなか、私と家族を受け入れご飯を作ってくれた親戚には、今でも感謝しています。また、避難先では慣れないことばかりで精神的に辛い時期がありましたが、転校先の新しい友人や先生に支えていただき、苦しい時期を乗り越えることができました。古くからの友人や前の学校の先生も心配して連絡をくれたり、避難先まで会いにきてくれました。震災を通して出会ったボランティアの方々、被災者のために様々な支援をしてくださった方々にもとても感謝しています。震災を通じて、人間の悪い部分が見えましたが、同時に人の良さも知りました。大変なこともありますが、今まで関わった人たちに感謝の気持ちを伝えたいです。

**「大丈夫？」ではなく「大変でしたね」と ―― 大学2年生／岩手県出身・山梨県在住／女性**

震災の影響で、地元を離れ、現在山梨で生活しています。被災地では、毎日数えきれないほど震災のニュースが溢れていましたが、私にとってそれらのニュースはどんな前向きな内容でも胸が苦しくなり、聞きたくないと感じるものでした。でも、離れてみると震災関連のニュースは少なく、「震災を経験していない人にこそ、届けるべき被災地のニュースがあるのではないか」と思うようになりました。被災した地元では震災を思い出さずに楽しめるニュースが、山梨では一人でも多く震災の情報を得るニュースが流れることを望んでいます。また、私が陸前高田から来たとわかると、みんなが「大丈夫でしたか」と口にします。気遣ってくださる気持ちが伝わり、とてもありがたいのですが、私はいつの間にか「大丈夫です」とつくり笑顔で答える習慣が身についていました。日本全国に震災で被災した人たちが生活していますが、大切な誰かをなくして「大丈夫」だった人はいません。どうか、震災の被害にあった人と出会ったら、「大丈夫？」ではなく「大変でしたね」と声をかけてください。

**父に言いたかった「ありがとう」の言葉 ―― 大学2年生／岩手県出身・在住／男性**

昨春、大学に入学しました。初めは、不慣れな街で知らない人ばかりのなか、不安でいっぱいでしたが、先輩や友人などたくさんの人との新しい出会いを通じて、「一期一会」という言葉を深く理解するようになりました。そして、出会いは本当に貴重だと気づくとともに、家族や自分とかかわりをもつすべての人に感謝や尊敬の念を伝えていくことが大切だと強く感じています。私は震災で父を亡くしました。その父に「ありがとう」の一言をちゃんと伝えられなかったことをずっと後悔しています。今、私が伝えたいこと。それは、人生において家族を含め出会いこそがすべてであり、そこには無駄なものは一つもないということです。親切にしてもらったことや当たり前とみなしがちなことに対する感謝の気持ちを忘れず、その想いをしっかり口にして伝え、生きていきたいと思っています。

## 【この1年間で印象に残っていること】

**初の世界大会で3位入賞、「夢は東京パラリンピックで金メダル」―― 大学3年生/宮城県出身・在住/女性**

私は今年、やり投げで初めて世界大会に出場しました。大学に入学してから各地で行われる選考会に参加し、記録や結果が評価され日本代表に選ばれました。フランスのリヨンで開催された障がいをもつ選手による陸上競技大会「IPC陸上競技世界選手権大会」で3位入賞、銅メダルを獲得することができました。しかし、世界の舞台で感じたことは、私はまだまだ未熟ということです。緊張してしまい自分のもつ力を最大限に発揮できず、自分自身の弱さに気付くことができました。私の夢はパラリンピックに出場することです。この1年間はその夢の実現により近づくことができた1年だったと実感しています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックも決まり、目標が「東京パラリンピックで金メダル」と明確になりました。大学生活も折り返しとなりましたが、勉強と同様に部活動に力を入れていきたいです。

**「後世に震災の出来事を伝えていく」―― 大学1年生/宮城県出身・在住/男性**

徳島県で震災のことを話す講演会に参加しました。人前で震災のことを話してみると、涙が止まらず、同時に震災当時の様々な記憶がよみがえってきました。私が「南三陸町に関係のない人たちが、寒い中テントで暮らしながらもボランティア活動をしてくれていた」という話をした際に、高校生に「関係なくなんてない。みんな同じ日本人」と言っていただきました。私はその時にひどいことを言ったと後悔した反面、こんなことを言ってくれる高校生がいるのだと嬉しい気持ちになりました。あの震災を生きた私たちの使命は、後世に震災の出来事を伝え、二度と悲しむ人を出さないように津波の怖さを伝えることです。これからも私は震災を生き延びることができた人の使命を全うしていきたいと思います。

# 奨学生の2013年度の振り返り-2

## 【私が学んだこと】

**「若い世代が復興に向けてできることを」―― 高校3年生/福島出身・在住/女性**

私は昨年、学校の研修旅行で阪神淡路大震災の被害にあった兵庫県神戸市長田区を訪れました。神戸市の職員の方が撮影した地震発生直後の街の様子を見て、東日本大震災の発生直後の混乱した状況を思い出し、悲しい気持ちや辛い記憶がよみがえってきました。その後、実際に現在の神戸市長田区の商店街を歩いて学んだことは、いつまでも震災を思い出して悲しんでいるのではなく、復興に向けて自ら活動している方々の前向きな姿勢です。ボランティアや義援金に頼るだけではなく、商店街の再建や新しいことに取り組んでいました。震災から今年で3年という節目を迎えました。いつまでも悲しみに暮れるのではなく、私たち若い世代が自ら復興に向けて出来ることをすべきだと思います。

**「建築士になって故郷の街並みを復活させたい」―― 高校3年生/宮城県出身・在住/男性**

あの震災から3年が経ちました。震災を経験していろんなことを学びましたが、特に感じたのは全国の皆さんの優しさ、思いやりです。僕は高校で建築や設計を学んでいます。建築図面を書くことは大変難しいですが、高校在学中に2級建築士の免許取得を目指しています。また就職したら１級の免許を取得し、大きな家やビルなどを設計できるようになりたいです。そして、復興に役立つ建築士になり、ふるさと石巻市雄勝町の街並みを復活させたいと思います。夢をもつことが志をもつことにつながることを震災復興の活動ボランティアの皆さんに学びました。将来は、地域へ貢献する活動や、ほかの地域の人たちが被災した時には、これまでの恩返しができれば嬉しいと思って毎日頑張っています。

**「大人になったよ」と言えるように ―― 大学3年生/宮城県出身・在住/女性**

私は今年度、20歳になり、成人式を終えました。学校生活に慣れてはきたものの、授業のレベルが上がりついていくのに必死です。アルバイトもいくつか経験し、社会勉強、お金のありがたみ、そして、母への感謝の気持ちを改めて感じることができました。今年で震災から3年が経ち、あれから私はどれだけ成長できているのか、ちゃんとした大人になれているのか正直自信がありません。それでも精一杯学び、成長し、自立し、いつか「大人になったよ」と、震災で亡くなったおばあちゃんとおばさんに胸をはって言えるようになりたいです。そのためにも今はやるべきことをこなすのが私のできることです。今年も大学に通うため、「夢を応援基金」の奨学金のお世話になりながら、また1年がんばっていきたいと思います。

## 【私の宝物】

**「学校は嫌なところじゃない」―― 専門学校１年生／福島県出身・茨城県在住／女性**

原発事故の影響で福島から茨城に転校しました。福島の中学では、イジメを受けたことがあり、学校は怖い所だと思っていました。知らない土地での登校はさらに不安で、当時は『避難者』に対して嫌がらせがあるという噂を聞き、入学式にも出られませんでした。でも家族に押され、一ヶ月遅れで登校してみると、すんなり受け入れてもらえました。最初に話しかけてくれた3人のクラスメイトとは、クラブも一緒で、修学旅行でも同じ部屋になり、卒業の思い出にはディズニーランドへ行きました。母から「えくぼが復活したね」と言われ、彼らに会うまで随分笑っていなかったことに気づきました。3.11があって、茨城の学校に来たからこそ大親友ができ、新しい自分に出会え、将来への『トビラ』が見つかったのです。皆、別々の道に進みますが、「学校は嫌なところじゃない」と思わせてくれた友人に感謝しています。

**「亡き父にもらったネコのぬいぐるみ」―― 大学３年生／岩手県出身・京都府在住／女性**

私が大切にしているのは、父からもらったネコのぬいぐるみです。見るといつも震災で亡くなった父を思い出します。震災前、私はいつも父に対して反抗的でしたが、父はいつもやさしく話しかけ、出張の際にはお土産を買ってきてくれました。父が亡くなってから、父とのメールや写真など二人の思い出がないことに気づき、初めて今までの態度を後悔しました。そんな時、家があった所から偶然見つかったのが、ホワイトデーに父からもらったぬいぐるみです。父とはもう会えないし、今まで愛してくれたことを返すことはできないけれど、ぬいぐるみを通して父が私の成長を見守ってくれると信じ、前進していきたいです。

**「いつか地域の良さを教えられるように」―― 専門学校１年生／宮城県出身・在住／女性**

最も大切にしている宝物は、写真です。私は3年前の東日本大震災で家が津波に流されましたが、後にボランティアの方たちが写真を拾って洗浄してくれ、市民センターや区役所などに貼り出されました。そのなかに自分の家の写真を見つけたとき、心に残っていたものがよみがえってきました。写真を見て辛いと思う人もいるかもしれませんが、私はうつむきたくはありません。写真を通じて、被害の大きさを思い出し、犠牲になってしまった方たちのためにも明日を精一杯生きる人生の糧にしたいのです。私はこれからもたくさん写真を撮ろうと思います。将来、思い出に浸ることができるように。いつか自分の子どもに、震災前の地域の良さを教えることができるように。

**「身近な幸せ、気づかせてくれたグローブ」―― 大学1年生／宮城出身・山梨在住／男性**

私の宝物は、野球のグローブです。中学生の時、野球部に所属し、引退後も部の練習に顔を出すほどでしたが、津波で家が全壊し、自宅にあった野球道具もすべて流されてしまいました。随分ショックを受けましたが、父のグローブが奇跡的に見つかり、水で洗い少しずつ軟らかくして使えるようにしました。震災後、そのグローブでキャッチボールをした時、キャッチボールをできる幸せを感じ、普段できて当たり前のことは、陰で支えてくれる人がいるからこそ、と実感しました。このグローブには今、好きなプロ野球選手のサインが記されています。サインを書いていただいた日、その選手は試合でいい結果が出せませんでしたが、疲れた顔一つ見せずにファンにサインをしていて、どんなに苦しくて辛い時でも人に感謝する気持ちを忘れないことの大切さを学びました。

# 基金運営活動収支報告

## 「夢を応援基金」活動収支計算書（2013年4月～2014年3月）

（単位：円）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昨年度からの繰越金 | | | **¥415,529,289** |
| 寄付金等収入 | | | **¥228,634,348** |
| 店頭募金 | | ¥211,401,560 | |
| ローソン | ¥211,295,903 | | |
| ローソンＨＭＶエンタテイメント | ¥105,657 | | |
| 寄付つき商品 | | ¥3,414,130 | |
| ローソンお取引先＊ | ¥552,258 | | |
| ローソン | ¥2,861,872 | | |
| ローソングループ社内募金 | | ¥13,661,158 | |
| チャリティ・プラットフォーム、Civic Forceを通じての寄付・募金 | | ¥157,500 | |
| その他収入 | | | **¥63,838** |
| 受取利息 | | ¥63,838 | |
| **収入合計** | | | **¥228,698,186** |
| 奨学金支出 | | | **¥319,170,000** |
| 奨学金（896名） | | ¥319,170,000 | |
| 基金運営支出 | | | **¥12,260,112** |
| 基金運営管理費用 | | ¥11,743,270 | |
| 交流会開催費用 | | ¥505,502 | |
| 奨学金等振込手数料 | | ¥11,340 | |
| **支出合計** | | | **¥331,430,112** |
| **次期繰越金** | | | **¥312,797,363** |

＊　寄付つき商品の販売による寄付は、下記のローソンお取引先（企業）のご協力によるものです。（順不同）
アイリスオーヤマ株式会社、コスモフーズ株式会社、山崎製パン株式会社

## ～寄付つき商品について～

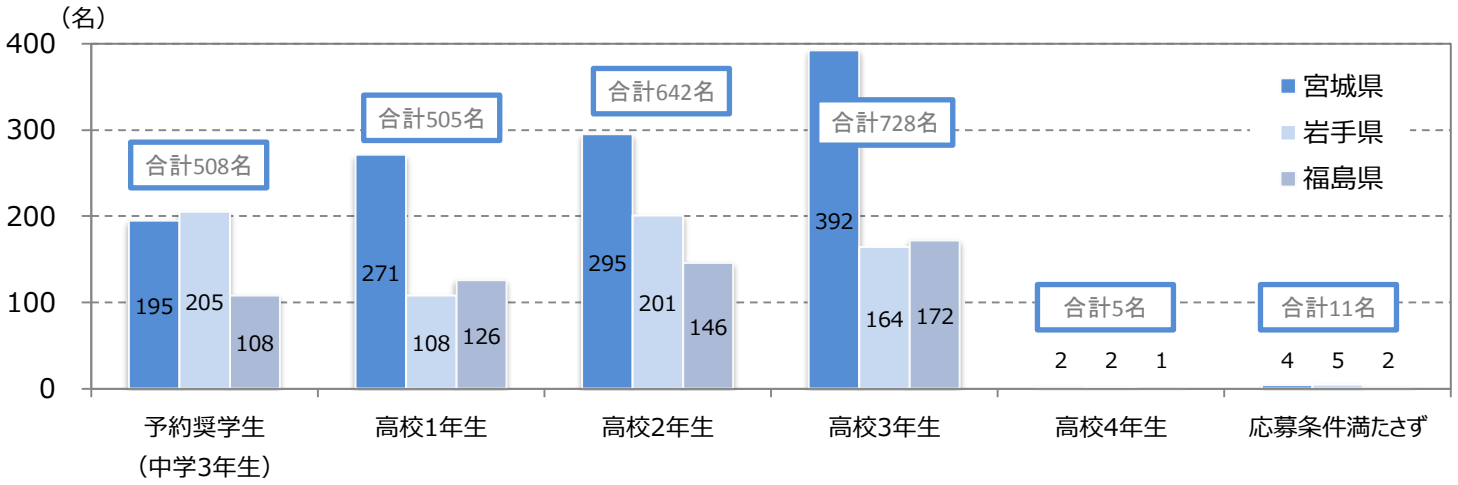
ローソンはお取引先様と連携し、売上金の一部を「夢を応援基金」に寄付する、寄付つき商品を随時販売しています。

写真上は2014年1月に東北エリア限定で販売された「秋田仕立てのレアチーズスティック」。

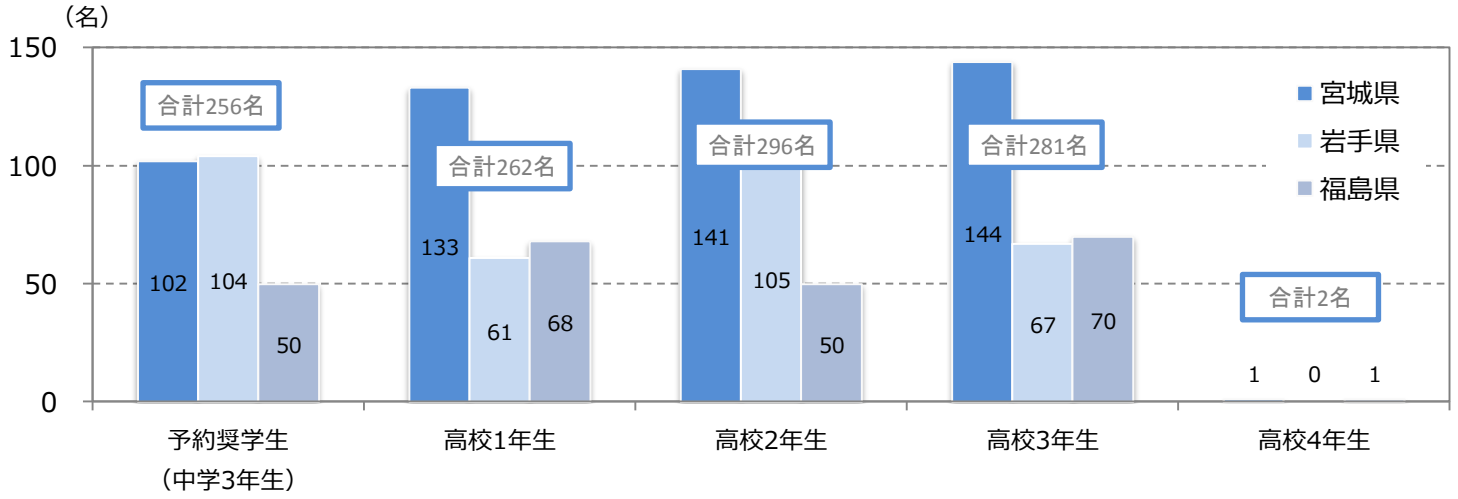
写真下は青森県立三本農業高等学校の生徒さんが青森県産のリンゴなど地産食材を使用し考案した「三農の恵みアップルン」。2013年10月に青森県内で限定販売されました。

# 奨学生等の状況

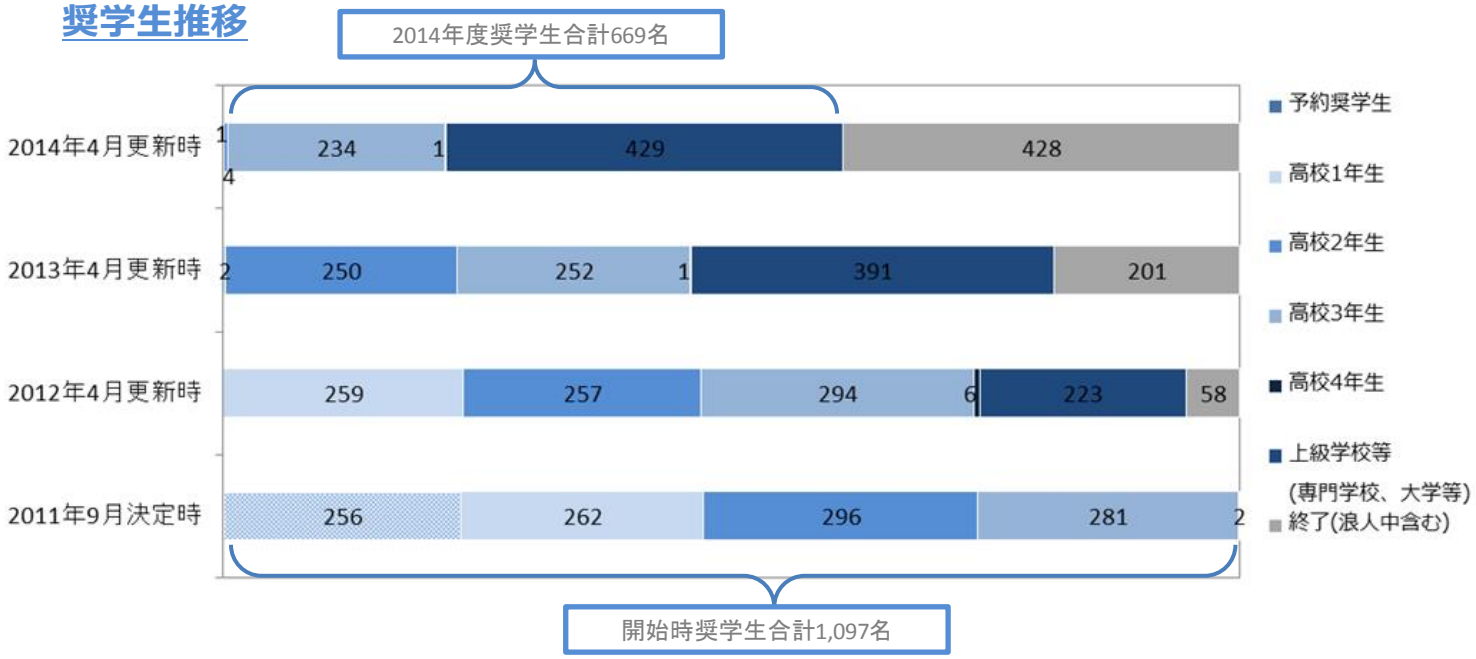
## 応募数内訳（合計2,400名。3県外からの応募だった1名は下記のグラフに含まれていない）




## 奨学生決定数内訳（合計1,097名。2011年9月末現在）




## 奨学生推移




*各生徒数は、2012年4月の更新手続きにおいて、募集時の情報の訂正等があり、以前に公表されたものと数値が異なる場合があります。